

彼は、藩士らに次のように言って西郷を赦した。

「孟子に、人を登用するのは最も念を入れるべきで、左右皆賢なりといっても、自らの目でとくと見定めない限りは、拔擢などしてはならない、とある。

しかしながら、その方らが、それほど申すものを、愚昧なわしが一人聞かんのは穏当なことではない。太守様(忠義)に伺いを立てよ。よしと仰せであつたら、わしも異存はない」

口惜しさが良くでている。

有名な話なのだが、この時、久光は悔しさのあまり口にしていた銀煙管の吸い口をヒステリックに噛んだ。

その吸い口には、西郷憎しの印刻として久光の歯型が残ってしまったという。

自分には、久光の心情もよくわかる。

それにしても、西郷の沖永良部島での仕置きは尋常ではなかった。

しかし死ななかつた。

彼は、「志」を生きる支えにはいたが、絶対生きて帰って俺のやりたい仕事をするんだ、という執念で命を永らえたのだろうか。

そうではなからう。

もし、そんな気持ちがあつたら、久光の命令を無断で破るようなことをしなかつたのではないか。

もう少し上手な処世の仕方があつたはずである。「志」のため、囲碁の腕をプロ並みになるまで磨いて久光に取り入った、大久保という良い手本がある。

西郷はそうはしなかった。

「相手の思惑より、自分の良心に素直」

これが、どの武士より西郷の特徴のような気がする。

この生き方は危ない。

外から見れば、ことのよしあしがはっきり表面にでて、当然軋轢が起こる。

現に、月照と心中したり、
久光による鳥送りにより死に損なっている。
しかし、死なずに踏みとどまった。